

キーワード：

美術
自然
教育
木材
彫刻

抄録

木は、古くから日本の気候風土の中で造形素材として多く使われてきた。現代の美術においても、木を素材とした様々な表現方法が試されている。本稿は、常葉大学造形学部の授業の中で、木材を用いた立体作品の制作を通して、木彫表現のための加工技術と知識を習得すること、自然観察をすることから木材について考え、その気づきから作品制作するというプロセスを実践したものである。

はじめに

広大な森林に多様な樹種を擁する日本では、木は古くから身近な造形素材として適材適所に活用され、様々なものが作られてきた。そして、現代の美術においても、木を素材とした様々な表現方法が実践されている。

木材は金属、石材、セメントなどの多くの材料とは異なった性質を保つものである。例えば金属を用いて作品を作るには、たいていの場合、統一された規格の大きさや太さのものを購入するか、または工業製品としてあるものを組み合わせて制作をすることが多い。しかし、木材の場合、金属、石材、セメントなどの工業材料とは違い、木材は元生物であった材料であるため、同じ種類の木であったとしても、厳密に同じ木肌のものとは存在しない。そのため、制作する中で木材の個々の特徴や癖を理解し、取り込みながら制作をしていく必要が出てくる。

本稿は常葉大学造形学部のアート領域の授業「立体メディア表現A」にて行った木材を用いた作品制作の過程についての報告である。

この実践では、木材による作品の制作の前に、自分自身の外界に目を向け、身の回りにある木などの植物を見つけ自然観察を行う。身近にある木を観察する中で気がついたことから作品のコンセプトを考え、工房内にある様々な木材を選ぶことから始めた。

1 課題文と授業計画

以下は、授業の中で学生に提示した課題文と授業計画である。

【課題文】

自然観察を行い、スケッチやエスキースをしながら、木や自然、または木材などの素材と作品の関係性などを考察し、木材を主に使って作品を制作しなさい。

◇自然を観察し、スケッチやエスキースを十分に行うこと。

◇自然と自分、作品の関係性などについて思考し、自

分なりの造形になるまで試行錯誤を繰り返すこと。

◇講評会ではレポートとコンセプト、作品を発表する。

※レポート(800字以上)、コンセプト(200字)はポータルサイトにて提出する。

【授業計画】

第1回：ガイダンス 工房の使い方 木を素材にした立体表現の意味と可能性について

第2回：自然観察 素材の加工について 木の種類や状態と加工の方法

第3回：自然観察 材料の検討

第4回：作品プランを考える 木工機械、木工道具の使い方1 材料の検討

第5回：エスキース コンセプトについて 木工機械、木工道具の使い方2

第6回：制作1 作品のイメージを具体化する

第7回：制作2 木の特性について

第8回：制作3 素材について

第9回：制作3 空間について

第10回：制作4 構成を考える

第11回：制作5 作品制作と自然について

第12回：制作6 作品コンセプト、レポートについて

第13回：作品仕上げ 講評会準備

第14回：講評会 振り返りとまとめ

第15回：片付け 掃除

2 自然観察を行う

どのような作品を作るのかを考える前に、屋外に出て、自然を観察する時間を設けた。大学内にある植物や木、それ以外の外界の自然現象や自然物を観察するよう促した。大学内で観察できる自然は、人工的に整備されているが、そこに生えている植物は力強く根をはやし、その生命力や、本来の姿に戻ろうとする様を感じる事ができる。

図1は制作を行う工房のすぐ裏にある崖の様子である。岩場から力強く自生する木の様子を見ることが出来る。図2も工房の裏、校庭の脇に生えている木である。図3は工房のフェンスに絡まる蔦の様子である。晴れた日は木漏れ日が気持ち良い。

学生たちの中には、雨上がりの水たまりや、昆虫などの生物、雲や風などに注目している様子が見えた。

作品を作るということを前提としながら、自然観察を行うということは、ただ木や葉を見るだけではなく、自然が作り出した景色の中で、美しさや儂さ、人類を含む動物や、人工的なものとの関係性など、自分以外の外界に目を向け、感覚や感性を通して気がついたことから、考え調べていくことである。自分の作りたい形をなんとなく木材で作るのではなく、木材でしかできない、または木材であるからこそ意味がある形を作ることを目的として、木とは何か、自然とは何かということを考えるために、自然観察という課題を行った。



図1

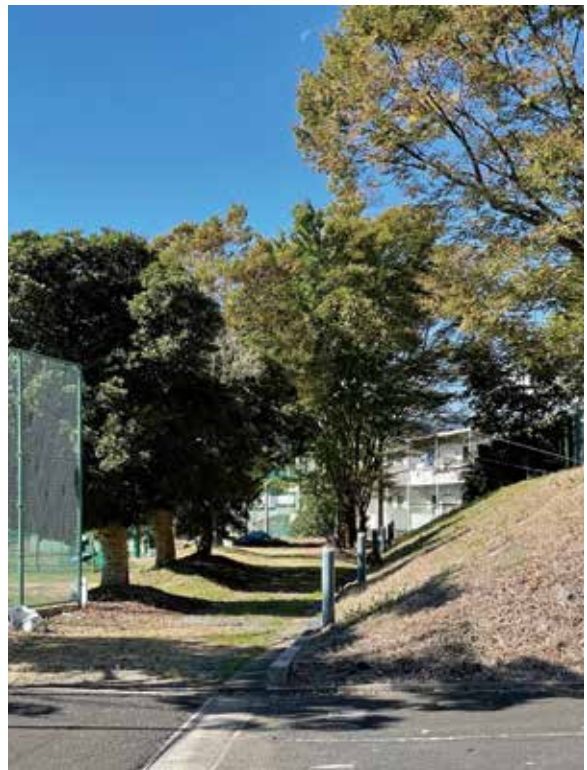


図2



図3

3 エスキースと材料となる木材の選択

自然観察を行い、個々でテーマを決めていく。図4は学生が自然観察をする中で出てきた作品についてのイメージである。

エスキースを行いながら、図5のように、工房にある木材がどんなものがあるか、作品に合わせて選んでいく。図6のように伐採された大きな木材も置かれている。図7はこの授業を行っている頃に学内で木を選定していた。のちに材料として分けてもらうことができ、学生とともに工房内に運んだ。



図5



図4 学生のエスキース



図6



図 7



図 8 鑿と木槌を使う様子

4 制作

作品のプランが決まったら、制作を始めていくが、制作の前に木材を加工するために必要な道具や機械の使い方を説明する。よく使われる道具や機械は、のこぎり、鑿、玄翁、木槌、彫刻刀、電動ドリル、チェーンソー、ベルトサンダーなどである。(図 8、9、10、11)

鑿や彫刻刀を安全に使うためには刃がどのようにできているのか、どうしたら欠けてしまい使えなくなるのかという知識をもち、安全面を常に注意しながら扱うことが大切である。チェーンソーは小さな刃物がたくさんついており、それが回転することで木材を切断することができる。学生が木材を切断するときには、常に教員が見ている中で行う。

基本的な道具の使い方と管理の仕方、安全について全員で学んだあと、それぞれの作品プランに合わせて必要な道具や作り方を個々に相談しながら決めていく。図 12 は、木の中身をひたすらくり抜いている。図 13 は木材を使い壁掛けにする作品を制作している。図 14 のように道具や機械をあまり使わずに空間にどのように置くのかを考え、組み立てていく者もいる。



図 9 電動ドリルで穴を空け、ネジを打つ



図10 チェーンソーで木材を切り出す



図12



図11 ベルトサンダー



図13



図 14

5 展示と講評会

作品が完成し、最後に講評会を行う。講評会は、大学内にあるギャラリースペースに設置し行った。講評会後は1週間展示される。

展示のための搬入を全員で協力しながら行う。図15は作品搬入の様子である。全員で作品を計画的に運び、図16、17のように作品を乗せる台座を相談しながら決めていく。図18のように大きい作品は数人が手伝いながら、作者の指示に沿って配置していく。

配置が決まったら、作品に照明を当てる。(図19)

図20は講評会の様子である。一人ひとり、どのような作品かを発表していく。作者の発表後に質問などの時間をもうけた。また、講評会までに作品のコンセプトと、自然観察から気がついたことをレポートにまとめ、各自発表のために準備を行った。

講評会が終わり、展示期間が終わったら、再び全員で搬出を行う。



図 16



図 17



図 15



図 18



図 19



図 20 講評会の様子



図 21 学生作品①



図 22 学生作品②



図 23 学生作品③



図 24 学生作品④

6 振り返り

作品の搬出後に、授業全体について振り返りを行った。学生たちからは、以下のような意見、感想が出た。

【木材の加工について】

- 硬く、もろい部分があり、扱いにくかった。
- 木の種類や特徴を知らないため、加工の想像がつかなかった。
- 加工された木と原木が混在していて迷った。
- 想像を超えて時間がかかった。
- 自分の手で加工できたことが良かった。
- 道具の適材適所に気がついた。
- 手加工から機械のありがたさを知った。
- 技を扱うこと、素材を扱うこと、良い形を選ぶことが楽しかった。

【自然観察から作品を考えるということについて難しかったところ】

- テーマが大きいため要素が多く、コンセプトを絞り込むことが難しかった。
- 自分の内面と自然観察をすり合わせるのが難しかった。
- 自然の意味が多様であるため、どこから考えたら良いか迷った。
- 木という素材にフォーカスすると狭くなり魅力を生かせない。
- 自然の完璧さを作品に落とし込むことができない。

おわりに

作品を作るには、特に立体作品となると何かしらの素材を使うこととなる。木材を用いた作品を制作するには、その特徴や種類、それに付随する道具と技能を習得する必要がある。

素材を知るだけではなく、作品のコンセプトと木材という素材をどのように繋げ、作品化していくのかというところはこの課題の制約の一つである。作品制作とは完全に自由な状態でできる場合だけではない。むしろ制約がある状態（予算、大きさ、時間等）の方が多くともいえる。ここに制作の難しさと面白さがあるように思われる。そのため、本課題では、木材を最初に渡すのではなく、自然観察を行い、木材や自然について考えるというプロセスを通して作品に向き合う工程とした。学生たちは、提示されたテーマと自らの接点を探ると同時に、それを木材で表すところに苦心した様子であった。作品制作は簡単に作れそうな形でも、想像以上に時間がかかること、シンプルな形はより精度が必要となる場合があることなどを知ることもまた学びである。自然観察と制作を自分の視点でつなぐこ

とができた学生がいた一方で、素材に引っ張られ、観察の気づきを作品に昇華できなかった例もあった。学生との振り返りの中で出た意見や、感想、講評会の時に提出したレポートの文章を参考とし、今後も作品を作ることの意味や、プロセス、制作を通した学びについて考えていきたい。

参考文献・資料

- 小原二郎『木の文化』2003 鹿児島出版社